⑩戦後文学の展開

雑誌ジャーナリズムの繁栄

◎ 文芸雑誌　1945復刊：『新潮』『文藝』

1946復刊：『中央公論』『改造』、

創刊『世界』『人間』『新日本文学』『近代文学』

◎ カストリ雑誌

占領下の文学

【検閲】

- 戦前：内務省による検閲　伏せ字
- 戦後：1945-1949

GHQ/SCAPによる検閲　痕跡残さず

事前検閲：CCD (民間検閲局)

事後検閲：GHQ/SCAP

日本出版法 趣旨　（1945年9月19日）

連合国最高司令官は日本に言論の自由を確立せんが為品に日本出版法を発令す。本出版法は言論を拘束するものに非ず寧ろ日本の諸刊行物に対し言論の自由に関し其の責任と意義とを育成せんとするを目的とす。特に報道の真実と宣伝の除去とを以て其の趣旨とす。本出版法は膏に日本に於ける凡ゆる新聞の報道論説及び広告のみならず，その他諸般の 刊行物にも亦之を適用す。

- 第一条 報道は厳に真実に則するを旨とすべし。
- 第二条 直接又は間接に公安を害するが如きものは之を掲載すべからず。
- 第三条 連合国に関し虚偽的又は破壊的批評を加ふべからず。
- 第四条 連合国進駐軍に関し破壊的批評を為し又は軍に対し不信又は憤激を招来するが如き記事は一切之を掲載すべからず。
- 第五条 連合国軍隊の動向に関し，公式に記事解禁とならざる限り之を掲載し又は論議すべからず。
- 第六条 報道記事は事実に別して之を掲載し，何等筆者の意見を加ふべからず。
- 第七条 報道記事は宣伝の目的を以て之に色彩を施すべからず。
- 第八条 宣伝を強化拡大せんが為に報道記事中の些末的事項を過当に強調すべからず。
- 第九条 報道記事は関係事項又は細目の省略に依って之を歪曲すべからず。
- 第十条 新聞の編集に当り，何等かの宣伝方針を確立し，若しくは発展せしめんが為の目的を以て記事を不当に顕著ならしむべからず。

CCD 雑誌及ビ定期刊行物ノ事前検閲ニ関スル手続」

- 9.訂正ハ常ニ必ズ製作ノ組直シヲ以テナスベク，絶対ニ削除箇所ヲインキニテ抹消シ，余白トシテ残シ、或ハソノ他ノ方法ヲ以テナスベカラズ。尚，ゲラ刷ヲ提出セル後ハ，当検閲部ノ承認ナキ追加又ハ変更ヲナスコトヲ得ズ。

- 出版社への注意書
- 削除を指令されたる場合は左の如き行為をせず必ず組み変え印刷すること
- １，墨にて塗りつぶすこと
- ２，白紙をはること
- ３，○○○等にて埋めること
- ４，白くブランクにすること
- ５，頁を破り取ること

山本嘉次郎

「カツドオヤ微憤録：アメリカによる映画検閲滑稽譚」
(『文藝春秋』30-9.1952.6)

- 焼跡を撮影することは、絶対まかりならぬと来た。占領政策の妨害になるというのである。 (略) 焼け跡ばかりか、横文字の道路標識や、ジープや、進駐軍の建物等、一切いけない。偶然に映ってしまっても、弁解は許されず、カットあれてしまう。いまの東京で、横文字や、進駐軍施設をカメラに入れまいとするのは、並大抵の苦労ではない。 (略) 要するに「日本が負けたこと」「日本をアメリカが占領していること」の事実を画面に現すことを禁じられたのである。

銀座四丁目
TIMES SQUARE
次銀座七丁目

時計店
TOKYO
GINZA

プランゲ文庫

- 連合国最高司令官総司令部（GHQ/SCAP）民間検閲支隊（Civil Censorship Detachment, CCD）は、占領政策の浸透と思想動向の綿密な調査を行うために検閲を実施。
- 検閲の対象は、我が国で出版されたあらゆる図書、雑誌、新聞のほか、映画、演劇、放送番組はもとより、学級新聞のようなミニコミ誌、郵便、電報に及び、さらには電話の盗聴も行われた。
- 検閲制度は1949年の10月に終了し、同年11月にCCDが廃止。
- マッカーサーのための戦史の編纂作業にあたっていたゴードン・W・プランゲ（Gordon William Prange 1910-1980）が、そのうちの図書、雑誌、新聞等をメリーランド大学に移管。
- 同大学では、1962年から資料の整理を開始、1978年には正式に文庫名を「ゴードン・W・プランゲ文庫 -- 1945-1952年日本における連合国の占領」と命名。プランゲ文庫は、雑誌約13,800タイトル、新聞・通信約18,000タイトル、図書約73,000冊、通信社写真10,000枚、地図・通信640枚、ポスター90枚からなる。このなかには、約60万ページの検閲文書を含んでいる。

新日本文学

- 文学団体。 1945年 12月 30日創設。第2次世界大戦後，長年弾圧されていたプロレタリア文学の復興と，さらに広範な民主主義文学勢力の結集を目指し，蔵原惟人，壺井繁治，中野重治，秋田雨雀，江口渙，窪川鶴次郎，徳永直，藤森成吉，宮本百合子が発起人となり 173名が参加して発足，翌年3月機関誌『新日本文学』を創刊した。

近代文学

- 文芸雑誌。 1946年1月〜64年8月。月刊。本多秋五，平野謙，山室静，埴谷雄高，荒正人，佐々木基一，小田切秀雄の7人を同人
- 文学者の戦争責任と転向問題，マルクス主義文学，運動の批判などを軸に近代的自我の確立を唱える。
- 荒正人の『第二の青春』(1946)，平野謙の『島崎藤村』(47)，本多秋五の『小林秀雄論』(48)，佐々木基一の『個性復興』(48)，埴谷雄高の小説『死霊』(46〜49) などを生んだ。
- 47年中野重治ら新日本文学会主流との政治と文学論争の過程で小田切秀雄が脱退。 47〜48年にわたり同人拡大を行い，野間宏，中村真一郎，福永武彦，加藤周一，花田清輝，平田次三郎，椎名麟三，梅崎春生，武田泰淳，安部公房，島尾敏雄，青山光二，原民喜，中田耕治，高橋義孝，寺田透，三島由紀夫ら総勢32名となり，戦後派文学者の一大拠点となった。
- 私小説否定の文学伝統の端緒を築いたが，その責務が終ったと目される56年財政的理由で拡大同人を解散，旧同人6名に復した。以後，新人に多く誌面をさき，59年には近代文学賞を設置した。

政治と文学論争

- 荒正人「第二の青春」『近代文学』1946、1(2)
- 平野謙「ひとつの反措定」『新生活』1946.4-5
- 中野重治「批評の人間性１」『新日本文学』1946.7
- 岩上順一「小林多喜二論」『世界評論』1946.9
- 平野謙「政治と文学2」『新潮』1946.10
- 小田切秀雄「小林多喜二問題―『党生活者』をめぐつて」1947.4

- 同志愛ののなれのはて....ヒューマニズムの否定者としてのエゴイズムーーまづこれを大胆率直にみとめよう。....エゴイズムを拡充
した高次のヒューマニズムこそ、わたくしたちが、第一の青春といふ浪費のなかから購ふことのできた唯一の財貨ではないか。
.....
歴史の暗い谷間を通ってきた三十歳代の、宿命にも似た使命が生まれるのだ。....わたくしたち三十歳代よ、第二の青春に捧げる犠牲を惜しむことなかれ！（荒正人「第二の青春」1946.1）
- 小林多喜二と火野葦平とをひとしく時代の犠牲とながめるような「成熟した文学的肉眼」がやはり必要なのだ。(平野謙「ひとつの反措定」1946.4-5)
- 政治を人間的に考へることの出来ぬもの、人間的な政治を人間的に空想することの出来ぬ批評家が目的のために手段をえらばぬのは自然である。....彼らは彼ら自身の尾ろうな想像と死んだもの・亡命したものとを土台として目的を達しようとしている。彼らの生き方、目的のためには手段をえらばぬこと、そのためには捏造をこと〻すること、特に死んだもの・亡命したものを引合いに出してはゞからぬこと、そのことで却つて自信を持つてい〻気になつてゐることは彼等の人間性質を剥き出しにしてゐる。(中野重治「批評の人間性」（一）1946.7）
- 人間侮蔑とは反対に、人間の尊厳と個人の権威とを瞭然と打ち出すためには、いまこそ「個人主義文学」の確立が必要なのだ。(平野謙「政治と文学2」1946.10）

- 杉本良吉が岡田嘉子を利用
- 小林多喜二「党生活者」における笠原
- ハウス・キーパー問題

- 宮本百合子1899 徳永直1899 中野重治1902 蔵原惟人1902 小林多喜二1903 窪川鶴次郎1903
- 平野謙 1907 本多秋五1908 荒正人 1913 佐々木基一1914 小田切秀雄1916

無頼派

- 第2次世界大戦終結直後の混乱期に，反俗･反権威･ 反道徳的言動で時代を象徴することになった一群の作家たちをいう。通常，石川淳，織田作之助，坂口安吾，太宰治，檀一雄らを指す。

1947、新潮社

1948、筑摩書房

坂口安吾「堕落論」 『新潮』1946.4

- 戦争に負けたから堕ちるのではないのだ。人間だから堕ちるのであり、生きているから堕ちるだけだ。だが人間は永遠に堕ちぬくことはできないだろう。 (略) 人は正しく堕ちる道を堕ちきることが必要なのだ。そして人の如くに日本も亦堕ちることが必要であろう。堕ちる道を堕ちきることによって、自分自身を発見し、救わなければならない。政治による救いなどは上皮だけの愚にもつかない物である。

戦後の新人

- 第一次戦後派（1946,47にデビュー）

野間宏、梅崎春生、椎名麟三、埴谷雄高、武田泰淳

- 第二次戦後派（1948,49にデビュー）

大岡昇平、安部公房、堀田善衛、島尾敏雄、三島由紀夫

- 第三の新人（1950年代前半にデビュー）

小島信夫、安岡章太郎、阿川弘之、吉行淳之介、庄野潤三、遠藤周作

戦後の新人

- 第一次戦後派（1946,47にデビュー）

野間宏1915、梅崎春生1915、椎名麟三1911、埴谷雄高1909、武田泰淳1912

- 第二次戦後派（1948,49にデビュー）

大岡昇平1909、安部公房1924、堀田善衛1918、島尾敏雄1917、三島由紀夫1925

- 第三の新人（1950年代前半にデビュー）

小島信夫1915、安岡章太郎1920、阿川弘之1920、吉行淳之介1924、庄野潤三1921、遠藤周作1923

第32回芥川賞受賞作
–昭和29年下半期–

- 小島信夫『アメリカン・スクール』　初出「文学界」(昭和29・9)
- 庄野潤三『プールサイド小景』初出「群像」
(昭和29・12)

1954年

- 1955年

「改憲・保守・安保護持」を掲げる自由民主党と、「護憲・革新・反安保」を掲げる日本社会党の二大政党体制成立。

ＧＮＰが、戦前（１９３４年〜３６年平均）の水準を超える。神武景気の幕開け。

- 1956年

経済企画庁が経済白書「日本経済の成長と近代化」の結びで「もはや戦後ではない」と記述。

国連加盟

水爆大怪獸映画

ゴジラ

原作・香山滋

ゴジラか、科学兵器か、驚異と戦慄の一大攻防戦！

放射能を吐く大怪獣の暴威は日本全土を恐怖のどん底に叩き込んだ！

宝田明　河内桃子　平田昭彦　志村喬

東宝株式会社 製作・配給

東宝 ©1954

空前の豪華配役！NHK連続放送劇の映画化！

君の名は

原作・菊田一夫

監督・大庭秀雄

松竹映画・話題の大作

島千景　佐田啓二　岸恵子　小林トシ子　川喜多雄二

笠智衆　淡路恵子　野添ひとみ　市川春代

小太夫　三井弘次　月優子　伊沢一郎　浪花千栄子　北龍二

月丘夢路　阿里道子

松竹 ©1953

小島信夫「アメリカン・スクール」

集合時刻の八時半がすぎたのに、係りの役人は出てこなかった。アメリカン・スクール見学団の一行はもう二、三十分も前からほぼ集合を完了していた。三十人ばかりの者が、通勤者にまじってこの県庁にたどりつき、いつのまにか彼らだけここに取り残されたように、バラバラになって石の階段の上だとか、砂利の上だとかに、腰をおろしていた。その中には女教員の姿も一つまじって見えた。盛装のつもりで、
ハイ・ヒールをはき仕立てたばかりの格子縞のスーツを着こみ帽子をつけているのが、かえって卑しいあわれなかんじをあたえた。

三十人ばかりの教員たちは、一度は皆、三階にある学務部までのぼり、この広場に追いもどされた。広場に集まれとの指示は、一週間前に行われた打ち合わせ会の時にはなかったのだ。その打ち合わせ会では、アメリカン・スクール見学の引率者である指導課の役人が、出席をとったあと注意を何カ条か述べた。そのうちの第一カ条が、集合時間の厳守であった。第二カ条が服装の清潔であった。がこの達しが終った瞬間に、ざわめきが起った。第三カ条が静粛を守ることだという達しが聞えるとようやくそのざわめきはとまった。第四カ条が弁当持参、往復十二粁の徒歩行軍に堪えられるように十分の腹拵えをしておくようにというのだった。終戦後三年、教員の腹は、日本人の誰にもおとらずへっていた。

選評

- 井上靖

　こんどの候補作品のうちで、作品本位で一作を選ぶとなると、私は小島信夫氏の「アメリカン・スクール」を選ぶほかなかった。これは人間の劣等意識を執拗に追求した作品で、一時期の日本人を諷刺して時代的意義もある力作である。多勢の人間も充分書き分けてあり、一つの作品として纏ってもいるし、ヴォリュームもある。

庄野潤三「プールサイド小景

プールでは、気合のかかった最後のダッシュが行われていた。

栗色の皮膚をした女子選手の身体が、次々と飛び込む。それを追っかけるのは、コーチの声だ。

一人の選手が、スタート台に這い上ると、そのままピタリと俯伏しになって、背中を波打たせて苦しそうに息をしている。

この時、プールの向う側を、ゆるやかに迂回して走って来た電車が通過する。吊革につかまって立っているのは、みな勤めの帰りのサラリーマンたちだ。

彼らの眼には、校舎を出外れて不意にひらけた展望の中に、新しくできたプールいっぱいに張った水の色と、コンクリートの上の女子選手たちの姿態が、飛び込む。

この情景は、暑気とさまざまな憂苦とで萎えてしまっている哀れな勤め人たちの心に、ほんの一瞬、慰めを投げかけたかも知れない。

選手たちの活気からやや遠ざかった位置に、一人の背の高い男が立って、練習を見ている。

柔和な、楽天的な顔をした男で、水泳パンツをはき、肩からケープを掛けている。

彼はこの学校の古い先輩であり、また今では小学部に在学する二人の男の子の父兄でもある青木弘男氏である

- 宇野浩二

『プールサイド小景』は、一読して、この作家の作風が大分かわった事に気がつき、いくらか変り映えがしたようである。これまでの幾つかの作品よりこの小説は大人びて来たのである、しかし、背のびして大人めいたような感じもある。しかし、こんどの候補作品の中で、過褒を承知で云うと、この小説は、或る一家の細やかな一面をちょいと上手に現している点で、全体にニュアンスが幾らか出ている点で、まず一ばん増しであろう。

- 滝井孝作

私は、庄野潤三氏の「プールサイド小景」が、一番よいと思った。これは、サラリーマン生活の不安、その細君の油断の心持など、サラリーマン生活の弱点を衝いたテーマで、このテーマは、このように明白に提出されると、皆んなが一応は心得ておくべきで、これは大勢に読んでもらいたいと思った。それに、この短篇は、うま味が多い。

まとめ

【既存の作家】

- 戦前の文脈の再構成　「民主主義」のなかで
- 反社会的な無頼派

【新人】

- 第一次戦後派
- 第二次戦後派

….戦時・敗戦を描く 社会性

- 第三の新人

….敗戦から戦後へ　私小説の復活